

お客様紹介

株式会社アドバンテック 愛媛本社・工場
真空機器事業部/マテリアル事業部 様

(ISO 9001:2015、ISO 14001:2015 認証登録)

株式会社クールトラスト O&M部/資産管理部 様

(ISO 9001:2015 認証登録)

〔取材者〕 審査員 美濃 英雄
Hideo Mino

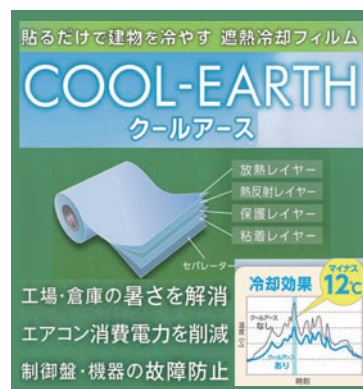
株式会社アドバンテック様は、半導体製造装置向けの真空配管部品などの製造・販売、さらにテスト用ウェーハやレアメタルなどを取り扱う電子事業/マテリアル事業にも積極的に取り組まれ、国内外の拠点を通じて幅広く事業を展開されています。愛媛本社・工場で2012年にISO 14001を認証取得され、その後ISO 9001も導入、横浜支社他拠点にも拡げられています。グループ企業の株式会社クールトラスト様(東京本社)は、太陽光発電所のO&M(運転及び保守管理)ならびに資産管理を担い、日々「熱の影響を受ける現場」を管理されています。2017年に社内のシステム改善を目的にISO 9001を認証取得されました。

近年、気候変動への対応はISOマネジメントシステム審査においても重要な観点となり、組織には、気候変動に関するリスクや機会を現場でどう実装し、説明しているかを示すことが求められるようになってきました。とりわけ夏場には、設備温度の上昇により「止めたくない設備を止めざるを得ない」あるいは「止められずにリスクや説明責任を抱え続ける」といった課題が顕在化しています。こうした現場の切実な声を起点に、アドバンテック様は、遮熱冷却フィルム「COOL-EARTH」を開発されました(<https://mono.ipros.com/product/detail/2001562053/>)。

両社の管理現場での検証・活用にて設備への熱負荷低減や安全性向上の効果確認を重ね、現在では、同様の課題を抱える工場や設備管理現場からの問い合わせも増えているとのことです。

審査では、現場改善をマネジメントシステムに取り込んで定着させていることが評価され、社内のモチベー

ションも高く、ISOの活用意識の高さが伺えました。現場と技術をグループで循環させるこの取り組みは、ISOが求める気候変動対応を“実装可能な形”で示すとともに、「高温による設備トラブル」などに課題を抱える事業者にとって、再現可能な一つのモデルとなっており、今後のさらなる展開が期待されます。



アドバンテック様開発『クールアース』

<https://www.advantec-japan.co.jp/>
<https://www.cool-trust.co.jp/>

連載
よみもの

審査員の心理

第44回 (環境編)

「パフォーマンス評価(5)」

環境主任審査員 大村 敏夫
Toshio Omura

前回は述べましたが、内部監査もPDCAのC(Check)の機能と位置づけられ、内部監査のアウトプットがA(Acton)のための情報源として機能していることが望ましいと考えています。内部監査を実施しても指摘や改善の機会などのアウトプットが出ていない組織も見かけることがあり、改善の余地があるのではないかと感じる場合があります。

内部監査員も社内の同僚であり、他部署であっても活動内容を理解しているはずで、内部監査では本音の困りごとなども話題になるかもしれません。規格要求事項に応える方法として他の手段もあるかもしれません。そのような場合の改善策など

も議論し、改善の機会として提起されると良いでしょう。

監査所見としての不適合と改善の機会のどちらにするかの判断の基準が不明確に感じることもあります。内部監査員教育で、不適合の指摘方法も教育されたかと思えます。基準(規格や手順書などで決められたこと)の引用、証拠(手順からの逸脱している状況)、結論という三段論法で指摘できる場合は、不適合と考えて良いでしょう。引用する基準が特定できない場合は不適合とするには無理があるかもしれません。

不適合の指摘への対応としては、検出された不適合状況の修正処置に引き続き、不適合の原因を取り除く是正処置が必要になります。是正処置としては、マネジメントシステムで定めた手順どおりに活動できるようにするという対応以外に、手順を見直すことも選択肢になる場合もあります。手順が過剰なもので、実施に難がある場合などでは、規格要求事項に応える方法として他の手段があるかもしれません。

マネジメントシステムを組織に適した形に見直していくツールとして内部監査が活かされていることが望まれます。